

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿⁺源氏解読

連載第 64 回 第 12.3 節

2020 年 8 月 15 日

小 田 勝

「12.3 目的格・格助詞「を」」の 373 頁から。用例(13)～(16)の類例、

- ・はかなきすさび(=チョットシタ芸事) をも、人まねに心^{こゝろ}を入るることもあるに(源・帯木)
- ・いかなる折を(=ドンナ機会ニ対シテ)かは、隙^{ひま}を見つけ侍るべからむ。(源・若菜下)
- ・[小少将ハ夕霧ヲ導キ入レタ。落葉宮ハ] いみじうあさましうつらしと、さぶらふ人を(=ニ対シテ)も、げにかかる世の人の心なれば、これよりまさる目をも見せつべかりけりと、頼もしき人もなくなり果て給ひぬる御身^{みみ}をかへすがへす悲しう思す。(源・夕霧)

用例(20)(21)の類例をあげる。

- ・住吉の神の導き給ふままに、はや舟出してこの浦を去りね。(源・明石)
- ・かくこの(=紫上ノ)御心(=ゴ機嫌)とり給ふほどに、花散里を離^あれはて給ひぬるこそ、[花散里ニトッテ]いとほしけれ。(源・澤標)
- ・これより大きな恥^{のぢ}に臨^{のぞ}まぬさきに世を遁^{のが}れなむと思ひ給へ立ちぬる。(源・須磨)
- ・旅を(=旅カラ)帰る雁どもあり(貫之集・詞書)

次例は「を」が目標点を示しているが、このような例は極めて稀である。

- ・なれぬれど都を急ぐ今朝なればさすが名残の惜しき宿かな(東関紀行)

用例(22)(23)の類例、

- ・潮干^{しほひ}のほどなれば、障りなく干潟を行く折しも(十六夜日記)
- ・たまさかに来るかとすれば目を渡る(=目ノ前ヲ通り過ギル)鳥のはやくも帰りぬるかな(夫木和歌抄) <「目を渡る鳥」ハ光陰ノ瞬時デアルコトノ喩エ。cf. 万 794 序>

用例(24)の類例、

- ・衣手^{ころも}の名木の川辺を春雨に我^{われ}立ち濡ると家思ふらむか(万 1696)

用例(25)～(28)の類例をあげる。

- ・霞立つ長き春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも(万 846)

- ・みさごみる入江の松も波なれて幾代を染める (=幾代ニ渡ッテ染メテイル) 緑なるらん (大式高遠集)
- ・色々に凝り咲く (=ギッシリト咲ク) 庭の梅の花幾代の春をにほひ来ぬらん (続後撰 56)

なお、古代語の「暮らす」は他動詞であるから(自動詞は「暮る」)、「…を暮らす」の「～を」句は目的語である。

- ・昨日をば花の蔭にて暮らしてき (和泉式部続集)
- ・つくづくと一年を暮らすほどだにも (徒然 7)

拙著『読解のための古典文法教室』の例題 [1] でもあげたが(同書 1～2 頁)、出どころを表す「を」は、現代語では無意志的な事態に用いることができないが、古代語には、その制約がない。

- ・ a 車 {を／から} 下りる。
- ・ b 車 {＊を／から} 落ちる。
- ・ c ＊煙が煙突を出る。＊月が山を出る。
- ・ 敷島や高円山の秋風に雲なき峰を出づる月影 (続後撰 320)

次のような「を」は、場所や時間を、動作の行われる環境として示す(「環境の「を」」などと呼ばれる)。現代語の場合は、

- ・ 雨 {＊を／の中を} 財布を探す。

のように、「…の中を」とする必要があるが、古典語では「を」だけで表現される。

- ・ 忘れず恋しきものは春の夜の夢の残りを覚むるなりけり (貫之集)
- ・ 朝ぼらけ浜名の橋はとだえして霞をわたる春の旅人 (続後撰 1316)
- ・ 生きてよも明日まで [我ハアラジ] 人もつらからじ (=我ニ冷淡ナラジ) この夕暮れを問はば問へかし (新古今 1329)
- ・ 今朝はなほ咲きそふ庭の花ざかりうつろはぬまをとふ人もがな (風雅 180)
- ・ 世の中を花の匂ひに誘はれてはかなき世をば何頼むらん (公任集)
- ・ さらぬだに寝ざめがちな冬を夜をならの枯葉にあられ降るなり (続後撰 502)
- ・ 吹きしをる松の嵐を分けすてて時雨をのぼる山の端の月 (沙弥蓮愉集)

中世でも、まだ、「雨を (=雨ノ中ヲ) 植ゆることは」(天草版イソホ 472) のような例が見える。

源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（9）

（増註版 18 頁、
新全集 27 頁）（母君は）未亡人の暮らしであるが、娘一人のお世話のために、あれこれ手入れをして、見て感じの良いようにして暮らしていらっしやったが、（今は）涙にくれて臥し沈んでいらっしやるうちに、草も高くなり、野分でいっそう荒れている感じがして、月の光だけが、八重葎にも遮られずに差し込んでいる。正面で^①（命婦を車から）降ろして（命婦を表座敷に通して）、（命婦と同様に）母君もすぐには何も言うことがおできにならない。「今まで生き残っておりますことがとても辛いのに、このような御勅使が、蓬の生い茂った草の露を分けてお越しくださるにつけても、たいそう恥ずかしいことで……」と言って、いかにも（生き残ったのが辛いと言った）言葉通り、命も堪えられなさそうにお泣きになる。『お伺いすると（想像よりも）いっそういたわしく、心も魂も消え入るようで……』と、（以前）典侍が奏上なさったが^②、物の情も存じません（私のような者の）心にも、（典侍の言葉通り）なるほどまことに忍びがとうございます」と言って、少し気持ちを落ち着かせてから、帝の仰せ言をお伝え申し上げます。『しばらくは夢かとばかり思い迷わずにはいられなかったが、だんだん心が静まるにつけて、（夢ではないから覚めるはずもなく）悲しみを慰める方法もなく^③（以下次号）

- （注）^①「方角は何方にまれ、正面のところを、南おもてといひならへる也」（玉小櫛）
^②「是よりさきに内侍のすけを御使につかはさるゝ事あるべし」（細流抄）
^③原文「さむ」は「（夢から）覚む」と「冷む」との掛詞。「思ひさまさんかたなくと也」（湖月抄）。「夢の心地しつる嘆きもさめにけり。」（濛標）。